

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24320153

研究課題名(和文) 18・19世紀北大西洋海域における海民の文化空間と海のリテラシー

研究課題名(英文) Maritime Literacy among Seafaring Men in the 18th and 19th century Atlantic Ocean: in the Cultural Perspective

研究代表者

田中 きく代 (TANAKA, Kikuyo)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：80207084

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,300,000円

研究成果の概要(和文)：海のリテラシー(情報を取得し、理解し、利用する能力)の研究で、18-19世紀の北大西洋海域の全体史を、「海民」が手ごわい海を「飼い馴らす」という視点から試みた。中間報告として「北大西洋海域の船をめぐる文化空間と「海民」のリテラシー 海を飼い馴らす」というシンポジウムを企画・報告した(2014年6月、日本西洋史学会)。その後、多様なテキストの理解を通して、文化共同体を包括的に見出していったが、2016年には、田中きく代・阿河雄二郎・金沢周作編著『海のリテラシー 北大西洋海域における「海民」の世界史』(創元社)を刊行した。陸の歴史とは異なる、また陸の歴史と架橋する可能性を提示した。

研究成果の概要(英文)： We tried to write a total history on the Atlantic, in the perspective of maritime literacy, which means a capacity to obtain, to understand, and to use maritime information. Especially, we focused on winning over the still dangerous Atlantic in the 18th and 19th centuries.

In the process of the research, we held a symposium on the research called "Maritime Literacy for Winning over the Atlantic: Seafaring Men, Maritime Texts, and Maritime Cultural Communities," at the conference of Western History Society which is was held at Rikkyo University, Tokyo.

Finally, we published, Maritime Literacy for Seafaring Men: An Atlantic History (Sogensha: Osaka, 2016), based on our four year project. We could propose many possibilities on maritime history, by showing many aspects different from the traditional continental history.

研究分野：アメリカ合衆国史

キーワード：海民 リテラシー 北大西洋海域 海洋史 境界域

## 1. 研究開始当初の背景

本研究では、北大西洋海域の両岸の海岸部あるいは近辺で、海民たちの古い共同体意識が崩れ、新しい共通意識が創造される過程を、文化人類学の方法を踏まえて、歴史学の立場から実証的に跡付けたいと考えていた。研究代表者ならびに研究分担者は B. ベイリンの *Atlantic History*、T. ファローラと K. ロバーツの *The Atlantic World*、B. クレインと G. マッケンサンの *Sea Changes: Historicizing the Ocean*、A. カバントウの *La mer et les hommes* など一連の研究や、G. ル・ブエデクの *Entre terre et mer* などの先行研究に刺激を受けて、北大西洋海域における「海民」たちの存在に注目し、上記のような問題意識を持つようになっていた。ちなみに、「海民」とは、G. ル・ブエデクのいう広義の捉え方をして、漁民、船乗り、海岸部の農民、商人たちを指している。

だが、準備段階の一つとして、国際海洋史研究シンポジウム「海洋ネットワークから捉える大西洋海域史」(2011年10月)を開催していたように、従来は海洋ネットワークの解明を通して海民の世界を見る傾向にあった。これは研究のプロセスとしては必然的なものであったが、北大西洋海域の全体史を描き、アトランティック・ヒストリーを完成するには、海洋ネットワークの諸関係の上に、海民たちの農民とは異なる日常の生活様式やマ

ンタリテの研究といった認識の面での理解を重ね合わせなければならないという大きな課題が残されていた。

そこで、本研究では、大西洋海域のワールドの成立過程で、等しく解体されたヴァナキュラーな共同体が、やがて自立的に再編され、R.E. ウィービのいう新たなコミュニティ(社会的コミュニティ)として再構築される際に、その過程で生まれた新たな集団アイデンティティすなわち共通の歴史的記憶の創出に注目し、そこに見られた海のリテラシーの分析を通して、共通の歴史的記憶が紡がれる「場」や、そこでの儀礼や語りの変化を捉えることにした。

## 2. 研究の目的

18・19世紀の北大西洋海域では、一つのワールド(世界)というシステムが形成され、グローバルな諸力の影響が、政治・経済の次元のみならず文化的次元でも、次第に地域共同体にまで浸透した。本研究は、このワールドの構造に、文化的次元から、しかも、海民の世界の分析から切り込み、先述のように、北大西洋海域における全体史としてのアトランティック・ヒストリーを描こうとするものである。従来、周知のように、世界システム論や大西洋革命論に刺激されて、多くの北大西洋を一環として捉える研究が生まれたが、それらは経済的次元を重視するあまり、文化的次元にまで踏み込むものは少なかった。ま

た、海洋を射程としながらも、「陸の人」の視点から描かれる傾向があった。パラダイムの転換が望まれる状況にあった。

そこで、本研究では、ここでは、特に「海民」の共通意識を形成した広義のテキストに焦点をあて、それを媒介にして流布された海の情報を得て、それを理解し利用する能力、すなわち海のリテラシーに注目することでパラダイムの転換をはかろうとした。つまり、リテラシーの実態、またそのリテラシーの広がりによる文化共同体の検証から、海の地域共同体における文化空間の解体と再生の過程を探ることにした。

### 3. 研究の方法

方法論的には、E.ホプズボーム、C.ギアーを踏まえるが、海のリテラシーという時、J.ハーバース以降の公共圏の研究も参考にしてきた。また、リテラシーの視点から研究をしていくには、ストックとかフィッシュによって提起された解釈共同体論、テキスト共同体論がある。

本研究では、これらの先行研究に基づきながら、より広範な歴史事象に応用するために、情報の伝わる共同体を、解釈共同体、あるいはテキスト共同体ではなく、文化共同体と呼ぶことにした。

情報の媒体であるテキストも、より広範なものに設定し、航海日誌、ニュースレターといった文字史料のみならず、噂話、フォークロアなどのナラティブな無形のものも分析対象としている。

このように多種類の複数のテキストを介する情報を取得し、理解し、利用する「海民」たちが、そうしたリテラシーを磨く際に、特定の情報の広がりがある範囲を持つことが想定される。従来はそれを指して、解釈共同体あるいはテキスト共同体と呼んできたが、歴史的空間は多様で複層的で、複数のテキストによる複数の情報が絡みあっている空間である。本研究では、こうした空間をより包括的なものとして文化共同体としているのである。

また、共通の歴史的記憶は、共同体と外界の間の、「境界域」で生み出され蓄積される場合が多かったので、V.ターナーのリミナリティ論、コムニタス論などの諸理論や、グラムシの援用論に基づきながら、海の地域共同体の有する特性としての辺境性を捉える必要があった。ここに陸からは見えない、辺境での経験を通して共有された海洋を介する多様で複層的な海洋文化空間の共時性が見出される。

この意味での、方法論上での準備段階として、田中きく代他編『境界域から見る西洋世界 文化的ボーダーランドとマージナリティ』（ミネルヴァ書房、2011年）があったので、そこで提示した境界域の概念を海にあてはめ、北大西洋海域の陸と海の境界部分に注目することになった。海民の海洋での船の世界にも目を向けたが、それ以上に海浜部に関する研究を重視することになった。前浜での漁業、半農半漁の状況なども挙げられるが、職人が漁業にも従事していたこと

や、一人の海民のライフサイクルに複数のキャリアがあることや、さらには、船乗りの妻といった、船乗りの家族にも注目した。

人種・民族問題にも、関心をよせた。例えば、奴隷制廃止運動の激しかった合衆国北東部では、逃亡奴隷が捕鯨船に乗ることで長年にわたって奴隷狩りを避けたり、捕鯨の繁栄が母港での黒人コミュニティを支えたりした。また、船上は上下関係の厳しいヒエラルキーが厳然と存在している社会であったが、人種を超えて協力関係が成り立つ社会でもあった。相対的なものではないが、逃亡奴隷が自由を勝ち取る可能性をえることができる社会でこそ、奴隷制廃止運動が空想的ではない自由の精神を育むことができたのである。

4. 研究成果 4年間にわたり(一部研究は5年間に延長したが)、研究代表者、研究分担者、研究協力者は、個別研究や海外調査とともに、年に数回の共同研究会で、共同理解を深め、研究の進捗をはかってきたが、次第に18-19世紀の北大西洋海域での海のリテラシーの意義を、手ごわい海を「海を飼い馴らす」という点に見出していった。

そこで、中間報告として、2014年6月に、日本西洋史学会(立教大学)において、「北大西洋海域の船をめぐる文化空間と「海民」のリテラシー海を飼い馴らす」というシンポジウムを企画し、研究成果を報告した。研究代表者、分担者、

協力者は、それぞれ、研究報告、コメンテーターなどを務めた。

その後、より複数のテキストの理解、多様かつ共時性を持つ、北大西洋海域での文化共同体を包括的に見出していったが、4年目には、4年間の共同研究をまとめて、田中きく代・阿河雄二郎・金沢周作編著『海のリテラシー北大西洋海域における「海民」の世界史』(創元社)として刊行した。研究代表者、研究分担者、研究協力者の研究成果の一部ではあるが、成果を公開できた。まだまだ、研究途上ではあるが、海のリテラシーを視点に、陸の歴史とは異なる、また陸の歴史と架橋することもできる、一つの歴史研究の領域を示しえたのではないかと自負している。

『海のリテラシーにおける研究代表者、研究分担者、研究協力者による論稿は業績欄で報告しているが、その他共同研究会などで協力いただいたものをここで紹介しておく。

久田由佳子「靴職人、ジョセフ・ライ 19世紀初頭マサチューセッツ州リンにおける副業としての漁業、君塚弘恭「近世フランスの北大西洋世界 港湾ネットワークからみた多重経済構造」『海のリテラシー』238 - 257 頁、シルヴィアンヌ・リナレス「18世紀フランスの 小さな港 ミクロ資本主義の海域社会史『海のリテラシー』」258 - 274 頁、一瀬純也「帆船から蒸気船へ 外洋蒸気船の黎明期の課題」『海のリテラシー』、108 - 111 頁、國枝佳明「帆船の種類」『海のリテラシー』209 - 211 頁である。

5. 主な発表論文等(研究代表者、研究分担者  
及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計13件)

田中きく代「海民の世界と海のリテラシー」

1-14 頁、「フィギュアヘッドからシップバッジへ」  
300 - 302 頁、田中きく代・阿河雄二郎・金澤周  
作編著『海のリテラシー 北大西洋海域における  
「海民」の世界史』、査読無、2016

金澤周作「難破譚の中の船乗り」『海のリテラ  
シー』16-41 頁、査読無、2016

笠井俊和「船乗りと航海譚」『海のリテラシー』  
42-69 頁、査読無、2016

辻本庸子「侵犯する「海民」」『海のリテラシー』  
70-85 頁、査読無、2016

濱口忠大「海運業界誌の市況展望」『海のリテ  
ラシー』86-112 頁、査読無、2016

阿河雄二郎「貿易商人マテュラン・トラティエ  
ナポレオン時代における奴隷貿易の利潤と情  
報」『海のリテラシー』114-138 頁、査読無、2016

肥後本芳男「黒人船長ポール・カフィ アポリ  
シヨニズムと環大西洋商業ネットワーク」『海のリ  
テラシー』139-164 頁、査読無、2016

竹中興慈「奴隷商人セオフィラス・コノウ 19  
世紀前半の環大西洋非合法ネットワーク」『海のリ  
テラシー』165-189 頁、査読無、2016

田和正孝「石干見のアーケオロジー 大西洋  
沿岸域における石積み漁法に関する予察的研究」  
『海のリテラシー』214 - 237 頁、査読無、  
2016

佐保吉一「デンマークの西インド諸島 黒人  
奴隷制度史とカリブ海」『海のリテラシー』275 頁  
299 頁査、査読無、2016

阿河雄二郎「沼地のブルアージュ」『関西学  
院大学西洋史論集』(関西学院大学西洋史研  
究会)第38号、2015年3月57-66頁、査読無

田中きく代「金澤周作編『海のイギリス史 闘  
争と共生の世界史』『経済史研究』(大阪経済大  
学日本経済史研究所)第18号2015年1月  
193-203頁、査読有

田中きく代「アメリカ合衆国におけるフォーティ  
エーターズ研究の動向と展望 1848年革命と移  
民」『関西学院史学』(関西学院大学史学会)41  
号、2014年3月83-103頁、査読無

(学会発表)(計5件)

田中きく代「海を飼い馴らす」、シンポジウム、  
北大西洋海域の船をめぐる文化空間と「海民」  
のリテラシー(立教大学、東京都豊島区2014年  
6月1日)

阿河雄二郎「ナポレオン時代の奴隷貿易  
利潤と情報」シンポジウム、北大西洋海域の船を  
めぐる文化空間と「海民」のリテラシー(立教大学、  
東京都豊島区、2014年6月1日)

笠井俊和「18世紀アメリカにおける海運・船・  
船乗り情報」シンポジウム、北大西洋海域の船を  
めぐる文化空間と「海民」のリテラシー(立教大学、  
東京都豊島区、2014年6月1日)

金澤周作「遭難する船をめぐるリテラシー近代

イギリスの難破譚を手掛かりに」シンポジウム、北大西洋海域の船をめぐる文化空間と「海民」のリラシー(立教大学、東京都豊島区、2014年6月1日)

佐保吉一「コメント 海のリラシー」シンポジウム、北大西洋海域の船をめぐる文化空間と「海民」のリラシー(立教大学、東京都豊島区2014年6月1日)

〔図書〕(計3件)

田中きく代「ニューベッドフォードと捕鯨」森田雅也編『島国文化と異文化遭遇』(関西学院大学出版会、2015年)33-56頁、総247頁

阿河雄二郎「奴隷船が出港するまで 近世フランス奴隷貿易の一局面」森田雅也編『島国文化と異文化遭遇』(関西学院大学出版会、2015年)79-106頁、総247頁

金澤周作編『海のイギリス史 闘争と共生の世界史』(昭和堂、2013年)376頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

田中 きく代(TANAKA, Kikuyo)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号:80207084

(2)研究分担者

肥後本 芳男(HIGOMOTO, Yoshio)

同志社大学・グローバル地域文化学部・教授

研究者番号:00247793

田和 正和(TAWA, Masataka)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号:30217210

金澤 周作(KANAZAWA, Shusaku)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号:70337757

阿河 雄二郎(AGA, Yujiro)

大阪大学・言語文化研究科・名誉教授

研究者番号:80030188

佐保 吉一(SAHO, Yoshikazu)

東海大学・文学部・教授

研究者番号:00265109

竹中 興慈(TAKENAKA, Koji)

東北大学・国際文化研究科・名誉教授

研究者番号:50145942

辻本 庸子(TSUJIMOTO, Yoko)

神戸市外国語大学・外国語学部・名誉教授

研究者番号:70217313

合田 昌史(GODA, Masafumi)

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号:60202074

横山 良(YOKOYAMA, Ryo)

神戸大学・国際文化学研究科・名誉教授

研究者番号:30127873

(3)連携研究者( )

研究者番号:

(4)研究協力者( )

笠井 俊和(KASAI, Toshikazu)

濱口 忠大(HAMAGUCHI, Tadahiro)